第23回日本ジオパーク委員会議事録

日時: 2015年5月23日（土）9:30～13:00
場所: 公開プレゼンテーション　9:30-11:30　幕張メッセ国際会議場3階301会議室
　　委員会審議　　11:40-13:00　幕張メッセ会議場1階101A会議室

出席者:
委員長
尾池和夫　京都造形芸術大学長（日本地震学会）
副委員長
中田節也　東京大学地震研究所教授（日本火山学会）
委員(五十音順)
大野希一　島原半島ジオパーク（日本火山学会）
菊地俊夫　首都大学東京教授（日本地理学会）
佃　栄吉　産業技術総合研究所理事・地質調査総合センター代表
中川和之　時事通信社 山形支局長（日本地震学会）
成田　賢　応用地質株式会社代表取締役社長・全国地質調査業協会連合会会長
橋詰　潤　明治大学研究･知財戦略機構特任講師（第四紀学会）
平田大二　神奈川県立生命の星･地球博物館館長（日本地質学会）
宮原育子　宮城大学事業構想学部教授（日本地理学会）
目代邦康　公益財団法人自然保護助成基金主任研究員（第四紀学会）
顧問
伊藤和明　防災情報機構特定非営利活動法人会長
町田　洋　東京都立大学名誉教授
来賓
高木秀雄　早稲田大学教授（日本地質学会）
渡辺真人　APGN諮問委員
関係省庁
曽根　進　内閣府地方創生推進室参事官補佐
濱谷安輝護　外務省大臣官房国際文化協力室外務事務官
鹿嶋　誠　経済産業省産業技術環境局知的基盤整備推進室
柴田伊廣　文部科学省文化庁文化財部記念物課文部科学技官
山本　豊　環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
宮本利那　環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
事務局
齊藤清一　日本ジオパークネットワーク事務局事務局長
杉本伸一　日本ジオパークネットワーク事務局次長
佐戸慎一　日本ジオパークネットワーク事務局員
木村彰太郎　日本ジオパークネットワーク事務局員
内藤朋子　日本ジオパークネットワーク事務局員
神谷方子　日本ジオパークネットワーク事務局員

公開プレゼンテーション

司会者：松原　典孝　（兵庫県立大学院助教）
　　竹之内　耕　（糸魚川ジオパーク協議会）

9：30　開始

（事務局）プレゼンテーションの発表時間と委員、顧問、オブザーバーの質疑応答について説明。

【白山手取川 GP 】（世界 GP 加盟申請）

副市長よりあいさつおよび GGN 加盟申請の主旨説明後、事務局より申請内容について説明。

＜質疑応答＞

（委員）4 つある。前回の指摘事項の改善は、どのように図ったか？　なぜコピーを「水の旅」、「石の旅」にしないのか。分かりやすさでなく、なぜ？のなぞ解きがジオパークの楽しみではないか。「崩れ」というのであれば。　2 つ目。手取川流域を白山市に限る正当性は？　3 つ目。ジオパークの「水の旅」「石の旅」が、エコパークにどのような具体的な役割を果たすのか？　4 つ目。科学的調査研究を、どのように継続的に行っていくのか。

⇒　コピーの話、水の旅は市民に伝わった、分かりやすさで変えないでやっている。

白山市 1 市のみでやっている。源流から河口までといっているが、実は中流が抜けている。川北をなぜ入れないのかという質問があった。いま見える形は、現在の手取川で区切られておりその右岸に川北があるが、江戸時代は左岸にあった。石川郡という郡制ができて、そこが境になっている。川北町とは、一緒にツアー、学習をしながら活動をしている。

⇒　コピーについて。水がジオの元になっていて、分かりやすさの観点でそのまま使っている。白山市 1 市のエリアについては絵図の通り。研究については、金沢大学との連携を図りながら、進めていこうと取り組んでいる。

エコパークについてどのような貢献をしているかについては、高山植物の話をしたが、地球科学に着目するジオパークとエコでストーリーが生まれている。ネットワークについては、ジオのネットワークの活動実績を活かして、ユネスコエコパーク国内ネットワークが徐々に立ち上がろうとしているところだが、ジオパークで重ねた経験をそれにインプットしてどういったネットワークにしていくかをすすめているところ。

（委員）コメントと質問。ジオ、エコ、人といってもホームページなどで地域の人の姿が見えない。人が地域でそこで仕事している人、学んでいる子供たちとかガイドをして

いる人とか顔となる人たち生き生きと生きているというのをホームページで見てもらうにはそういうところの情報発信を強調したら良い。ジオパークで、こんないいことがあった。地域の人にいいことに繋がったことは何か？
⇒　平成20年から始めて、50回60回案内をして、私たちの住んでいるところにはこんな特徴があったのか、日ごろの風景が世界で非常に恵まれている地域なんだと理解していただけるようになった。自分が住んでいるところはなんとなくいいところと思っているのだがなかなか言葉として言えなかった。ジオパーク、水の旅、石の旅の何気ない風景の中で、私たちの特徴であり、財産だと多くの方々にご理解いただいている。白山のおかげ、と言うことは理解しているが、白山が白くなるから、水が飲めたり、お酒を飲めたりする。それを科学的に案内すると、自分たちの地域の特長を知って次につなげていこうという気運が高まってきたということは感じている。地域の気持ちが、ジオパークによって一つにまとまった。
　さらに、スタッフ自身が変わった。ジオパークという切り口で、科学的に物事を考えようと考えるようになった。

（委員）世界に申請したいというが、どこを国際的に訴えることができるか、私として未だ見えない。地理的な特徴は分かるが、ヨーロッパアルプスでの高度差などもあると思うので。　自分たちが何を貢献したいのかというのが重要。何を売り込めるか、どういう貢献を期待されるか。自己評価表の中で、該当なしが多いが、評価表は世界のスタンダードを知る上で非常に重要。例えば訪問者の見積もりについて、なにもされていない。もっとデータを集めてからの方がいいのでは。
⇒　高度差、コンパクトなエリア、だけでなく、分かりやすい上中下流が分かりやすく伝えられるのが売りだと考えている。自己評価表については、かなり確実に自信を持って言えるというものにだけ加算をした。抑えめに自己採点をしたために該当なしというところもあるが、全くなにもしていないわけではない。
⇒　観光客のカウントはやってはいる。入りこみはよく見えない。全部の施設を見ないとわからない。実数が見えてこない。あまりにまじめすぎてゼロになっているところはある。今回自己評価表はあまりにも厳しく判断している。

（委員）白山という範囲が妥当かということ。流域という自然区分で考えると果たして白山市だけで妥当か？
⇒　そのとおりだと思っている。総合土砂管理の流域は全体。どこまで水が行くかというと広い範囲。この範囲がベストだと思っていない。隣の町とかに価値を広めて、賛同を得て一緒になればいいと考えている。

【栗駒山麓GP】（日本GP加盟申請）

会長より挨拶及び主旨説明後、事務局より申請内容説明。

＜質疑応答＞
（委員）2 つ。46 億年の全地球史の中で、感じられる時間はごく僅かだが、どう考えるか。「地球史のページをめくる音」は、栗駒山麓でなくても、どこででも感じられると思うが、どうか。感じるのは「地球史のページをめくる『音』」と誤解されないか。
「負のままでは終われない」という住民のボトムアップ的なジオパーク活動の展開状況が、申請書では十分うかがえなかったが。被災後の「悦びに満ちた地域社会の構築」がジオパークの活動を通じて、どのように展開できているか。
⇒　地球史のページを巡る音、説明をどうするか、苦労する。そこで感じてもらうことにした。恐怖と、畏敬と、驚きが原動力。これが動いたと思える。ページをめくって新しい世界を感じると思った。音にこだわったのは、他に言いようがなかったから。スゴイものが見えると言うだけでは収れんするのでは。音は拡散する。そこで音にシンボライズなものを求めた。
⇒　３６団体と４つの専門部会ですすめている。4 つの部会でさまざまな事業をボトムアップ方式でやっている。岩手宮城内陸地震発生後、東日本大震災までの２年の間に、自主防災組織が確立をしている。市内ほとんどの小中学校でジオパーク教育に取り組んでいる。７年前の岩手宮城内陸地震の出来事を小学生はほとんど知らない。実際にフィールドで見ながら感じてもらうということで実施している。

（委員）減災に繋がることが重要だと思うが、災害を学ぶことは重要だが、地域が受けている恩恵については？
⇒　栗原市のみならず、北上川水系というひとつの大きな河川があり、山の恩恵は水。水と山の再生というスローガンで震災後の再生を考えている。下流のために上流がどうあるべきかを考えて連携もしている。登米、一ノ関、栗原は県境を越えて連携をしている。

（顧問）荒砥沢の地すべり地はダム湖で津波が起きているが、日本で初めてのこと。流れ込んだ土砂の量が 2%流れ込んだだけで 3m を超える津波が起きた。もしもっと大量な土砂だったらイタリアのバイヨントダムのようなことがおきた可能性がある。各地にあるダム湖に大きな警鐘になったので、ジオツアーなどを通じて全国に警鐘として発信して欲しい。
⇒　世界ダム会議があり、えん堤にボーリング調査をした。両翼を調査し、固くて大丈夫という話はいただいている。どのような大きな津波が出ていたかの物語は伝えたい。林野庁との連携で、立ち入りの検討、教え方も考えていきたい。

（委員）ジオに人がどう対応したのか、畏怖に対して対応しているのか、人がどう活用しているのかはジオパークの主要な要素だが。その点を盛り込む余地はあるのか。
⇒　これからもその要素は盛り込んで活動していきたい。

（委員）住民活動で、成功した、手応えを感じているという所があれば具体的に教えて欲しい。
⇒　合併市町村の 1600 人の職員。よそ者のような感じがあったが、全員に現場を見せて、区長さん方に歩いていただいて、実感をしてもらった。そこからいろいろな人も歩くようになった。子供たちのも、徐々に体験をしてもらって、興味を持ってもらっている。　ジオパークってなに？　と子どもに聞いたら、答えが出てくるようになって欲しい。

（委員）コメントとお願い。巨大地すべりを資源としてジオパークにどのように活用するか研究をし、情報を整理してきたことは素晴らしい。栗原は広いエリア。震災前から平野部ではグリーンツーリズムの先進地。農業も活発に行われている地域。地すべりと震災の関連を見てもらうだけではなく、市全体の資源の中で温泉も含めて、いろんな地域を回ってもらえる、滞在時間を長くする工夫をしてもらえればと思うが。
⇒　191 万まで伸びた観光客が 77 万に減ったが、昨年は 154 万まで回復、今年の目標は 180 万、20 年には 200 万超える勢いでやっている。広く他のジオパークとの連携もしていきたい。

（委員）すべったのは溶結凝灰岩。火山噴火は収束しているわけではないので、今ある地形地層から読み解くこともできるが、それを見えるようにしてほしい。

【*Mine* 秋吉台 GP】（日本 GP 加盟申請）
事務局より主旨および内容説明後、会長より意思表明。

＜質疑応答＞
（委員）この 2 年での、変化が実感できたが、その間、全国のジオパークから、何を受け継いだか？　どう学んだと言えるか？　重要なことがたくさんあり、それが今日のプレゼンにつながったと思うが、今後それをネットワークにどう貢献して返していこうと考えているか？また、どう変わってきたのか、モニタリングしてきたのか。
⇒　2 年前の見送りから一番変わったのは、我々事務局職員の思考回路。組織人として、市長の命を受けて働いている。トップダウンという働き方をしている。地元に入ってみると、一番大事なのはボトムアップなのだ。どう地域に還元していったかというと地域から変わらなければなにも変わらない。そのことを 70 回以上の出前講座で伝えてきた。

キーワードはジオパークの活動は未来への投資であるという伝え方をしている。ネットワークから学んだことは、15 カ所、他にも台湾にも学びに行った。その中で印象に残っているのは、糸魚川でジオサイトが地域の人によって維持管理されている仕組みを聞いた。我々も地域の方が維持管理するような仕組みをどんどん投げかけて、できつつあるところもある。

（委員）秋芳洞・秋吉台の観光がどう変わってきたか、モニタリングの結果などはあるか？
⇒　秋芳洞商店街との話し合いを続けている。GGN のガイドラインにはいかなる産地の石も売ってはいけないという項目がある。実際は石材の販売はされている。お客さんに対してのモニタリングを少ししたが、いちばんは商店街との話し合いを続けている。ジオパークの意義、GGN のガイドラインを示した上で商店街の方々は我々と共通認識を持った。生活の糧があるのでなかなか方向転換できないところもあり、まだまだ話し合いをしていく必要がある。ジオサイトという位置づけはしていない。

（委員）　石窯について語って欲しい
⇒　まず、安い。主人とレンガを組んで、周りに赤土もあるので、赤土とセメントを混ぜたものを覆って。間伐材もたくさんあって燃料費もかからない。それをいただいたり、買ったりしてパンを焼いている。石窯は遠赤外線効果で美味しく焼ける。必要以上に水分が飛ばない。うちのパンは、しっとりした水分が飛びきらないパンを作っている。パンを作るのに、粉は大切だが、水がすごく大切になる。秋吉台の水、石灰成分がすごく多く、湯沸かしポットが真っ白になる。パンにはアルカリの水があう。より美味しくしているのが秋吉台の水。赤土、間伐材に助けられている。秋吉台という地域から仕事をいただいて、暮らしを立てさせていただいている。恩返しができるように、探している。

（委員）美祢は赤土がたくさんあるが、それがなぜかということをパン屋さんがパンを出すときに語れると講習がどの程度効果を出しているかの判断の目安になるかなと。

（委員）既存のツーリズムと同差別化をするか、利害調整をするか、連携をするか？
⇒　実際にはエコツーリズム協会があり、隣接する宇部市が産業ツアーをやっていて採石場の露天掘りツアーをしている。我々が今から取り組むのはあくまでジオパークの理念に基づいたジオツアーをやるのはあたりまえだが、エコツーリズム教会のガイドと接触して、我々が考えるジオツアーのお手伝いができないか、いまはエコツーリズムのガイドだが、ジオガイドになる気はないかと言うことを説明をして、やってみようという人が少しずつ出てきている。観光の売り出し、観光協会が商品販売をできるようになっている。目標として、サービスのワンストップ化、ジオツアーもそこで一本化して戦略

に取り組もうという考えで観光協会とも合意している。そうして既存のものとジオのものを区別していこうと考えている。

（委員）　オーバーユースで自然がうまく保全されるのか。
⇒　遊歩道以外は歩いてはいけないというガイドの指導はしている。自然破壊は注意はしなければならない。

（委員）　赤土が利用できるものと、できないのは阿蘇の火砕流が載り、ドリーネの中に入っている。ここは、温帯カルストだが、熱帯のものとの違いも分かって置いて欲しい。洞窟内に浸食地形があるが、数万年から数千年の地球環境の研究の素材になるので、それも認識して欲しい。

（委員）メインは秋芳洞、その入り口で誰もが通る商店街が残念な状況。ただ若い人が入ってきて新しい活動も進んでいるのを見せていただいたが、今から行くと言うところにワクワク感があるような商店街の再生をジオパークでどうやって行こうとしているかのプランがあれば教えていただきたい。
⇒　多田さんや南君（住職）のような人をめがけて、ピックアップをした。石を売ったり、加工品を売ったりするのではなく、こういう商売で儲かるという成功事例を作って商店街に見せたい。そこから新たなヒントを、若い人を中心に考え方が変わってくると思う。まず、成功事例を見せて、改革をしていきたい。ジオパークのシステムをフルに活用したい。

【三島村 GP】（日本 GP 加盟申請）
会長より挨拶および主旨説明後、事務局から内容説明。

＜質疑応答＞
（委員）　三島村・鬼界カルデラジオパークの実現で、人口増加、入れ込みの目標値などはあるか？　それは過剰になってはいないか？　二つ目、どんな点を国内のジオパークから受け継いだのか、教訓を含めどう活かしたか、何を発信できるか。
⇒　人口は、5 年後に 400 人を目指している。交流人口が増えると、泊が増える。民宿を拡大しようという計画。お土産などの商品開発、農産物、水産物の開発をして、商品ができて、買っていただく。ワンデイクルーズの際に、15 分や 20 分の島での滞在の間に、一定規模の売り上げがあり、行けるという感触はある。

（委員）準備段階から申請に至るまで、国内外のジオパークの活動からどのような点を受け継いだか、また教訓として活かしたか。今後、ジオパークのネットワークにどう貢

献していこうと考えているか？
⇒　2月の連絡会があり、申請について気をつけるべきことを教えてもらった。住民を巻き込んでいくことが大事。住民が求めていることを先に提供していくこと。ヒアリングして、解決していくこと。　太古代からの環境と、未来も含んでいるというのがオリジナリティ。これだけ人口が少なくてもジオパークができると言うことを発信したい。

（委員）心配なこと。3つの島のジオパークとしての特徴がみんな同じなのか、変えて見せていくのか。硫黄島だけでいいということにならないか。それぞれ違うものを見せることになるのだろうけれどどうか。
⇒　3島全然違う。温泉があるのは硫黄島。植生も3島違う。まずは硫黄島に着目してもらうことで、他の島にも興味を持ってもらう。植物や歴史で３島を巡ってもらいたい。

（委員）ポテンシャルが高い場所だと思うが、バウンダリーが気になる。申請書にはどこからどこまでと書いていないので。海域があるから悩んでいると思うが。海域がないから漁業が成立っているところがあるのだろうが、カルデラがあるなら水没したところが非常に重要なので、海域をどこまでいれるかを考慮したほうがいいのでは。
⇒　カルデラの詳細な海底地形の取得をして、竹島と硫黄島の南の海域なんですが、カルデラがクリアに分かっている。海底も範囲に加えてはっきりしていきたい。

（顧問）　研究者には大変エキサイティングだが、住民への周知徹底、興味の喚起。中学で島を出て帰ってこないが、帰りたいと思うようなジオパーク活動が必要。そのへんをどう考えているか。小学校高学年から中学校の教育が非常に大切だと思うがいかがか。
⇒　東大を出て南極に言って、三島村に来ていると子供達に言うと、面白がってくれる。騙しているみたいだが。本音で、三島村は本当にスゴイと感じている人間が身近にいることで、子供達は何かを感じてくれると思う。島を出る前のこどもたちに、進路講演でそういうことも伝えている。日常的に研究者が来るとか明らかに観光客が増えると言うことがおこっている。子供達はすごいところだと感じてくれていると思う。ジオパーク活動を通じて、面白いという生の声が増えると帰りたいと思う子供達が出てくるのでは。

（顧問）役場は鹿児島市だが、３つの島の皆さんが中心でなくてはいけない。
⇒　まさしく課題だと思っている。若手を連れてきた。現場からの提案をしていただきたい。毎年、村政座談会をやっていて、4地区ともに村の幹部職員が全員行っている。地域創生の戦略には仕事を作ること。中学卒業して高校、大学に行った後、村に帰ってくるために仕事をどう作るか。そのためにこの5年であらゆることをやって行きたい。まだ気づかないところを気づけるのではないかなと考えている。その起爆剤にジオパークを活用して新たなチャレンジをしていきたい。

（顧問）鹿児島の方にも三島村のことをわかってもらう必要がある。申請書にあるが、船の中にビジターセンターを作るのは良いアイディアだ。

（委員）
　多くのジオパークでオーバーユースの問題が論じられることが多いが、本当に増えるとは思えないが、ここは本当に増えてしまいそうだ。メジャーでなかった屋久島が世界遺産になった後、対応がたいへんだったので、急に増えたときの保全の変化の計画を立てた方がいい。一緒に考えましょうということがいいのでは。
⇒　長期計画、1 日 1 便体制を作る。鹿児島を出発して 3 島を回って、枕崎に着ける体制。興味がある人は泊まってもらう。今のところ硫黄島になる。いまの民宿で 100 名弱の収容規模だが 150－200 に拡大することで村では計画している。合わせて定住の住宅も必要になるので村で回収経費を投入して環境の確保をする計画を立てている。

最後に竹島、硫黄島、黒島の町民の方からそれぞれ各島の現状およびジオパークに寄せる期待等のコメントがあった。

11：30　閉会

委員会審議

配付資料：1. 第 22 回議事録、2. 現地審査担当者、3. 箱根ジオパーク要望書、4. 日本ジオパーク委員会会則

事務局より 4 月以降の新しい委員の紹介（橋詰委員と平田委員）があり、その後それぞれ自己紹介があった。

［事務局より資料確認と委員長より本日の審議の流れについて説明］
委員長：議事録についてはご覧いただいており、今まで何もでてないようなので会議が終わるまでにご異論がなければ承認いただいたということにしたい。
申請地域に対してどういう判断をするか。世界 1 地域と日本 3 地域には現地審査に行くかどうかを決めるのが目的であり、審議をお願いしたい。議題でお知らせしているとおり課題改善報告の取扱とか委員会会則等順次すませていきたい。

審議の前に高木先生を顧問、渡辺先生を APGN 諮問委員ということで承認した。

［ 白山手取川 GP］
委員：現地に確認したほうがいいと思ったのは最初の自己評価表のところにジオサイトリストの項目がレ点になっている。ジオサイトのリストを上げなさいというとこで 20 以上が 100、40 以上が 200 のところ、ここをゼロとしているが、実際に資料に添付されたジオサイトリストが 37 ある。この用途別に分けていて、地学系となんとか系とに分けている。このへんのジオサイトの数え方やこの利用について白山手取川がどのような認識でいるのか。もしこれが出してあるならここは審査で質問されると思うので現地に確認をしたほうがいい。
委員長：その記入に関しては他にもあった。まだ出していないので直せるので直しても申請までもっていけるのかを議論していただきたい。
委員：世界ジオパークに申請することが何なのかわかっていなかったが、この 2 年でよく理解するようになったので是非現地に行って見ていただいたほうがいい。いくつかまだ指摘しなければならないところがあるし、自己評価表の書き方とかそういうものについてはまだまだだが、見るべきところはあると思う。
委員長：前にどなたが行かれたかまた候補もでている。そのへんもみながら内容の議論をしたい。行く候補になっている方からいろいろ聞きたいということもあるだろう。
委員：気になるのは、今年出したら 2 年かかること。来年も審査するが決定だけは 1 年遅れになる。
顧問：カレンダーとして、前は世界ジオパークネットワークその後ユネスコ、11 月の総会に通っての話なのであまり意味がないので。ユネスコの執行委員会に通らないとだめなので、次の春まで待たされるのかな、と。
委員：決定が 1 年遅れるだけで予定どおり 1 年おきの審査は繰り返していく。来年も審査ができるということ。結果発表が 1 年遅れになるということがわかった。
委員：世界にということでアピール点をいくつかあげていたが、ひとつにその砂防事業にどう向き合うのかについて発信していきたいというような発言をされていた。しかし、どう付き合うかの実態についてそれほど説明いただかなかったのだが。付き合い方を発信してどこかの立場にたって砂防工事等、山の価値等自然の聖地という保存の考え方を一方でだしつつ、砂防事業についてどうするのかというのをもう少し明確にするのであればそれを世界の中で知っておきたいというのはわかるが、あまりそこが漠然とされている形でわからないという感じがする。
委員長：短時間のプレゼンなので何もかもというのは求められないが砂防に対処しているのは間違いない場所なので、それがジオパークの意味で住民の暮らしとかどういうふうに関連しているかを審査するかどうかというのが今日の議題。当然現地に行くならそこの関わりはどうなっているのかときっちり言っていただく問題。
委員:昨日いらしたグレイさんにJGNの事業として日本のジオパークを見ていただくため、

ジオコンサベーションやダイバーシティーを考えるという意味で白山さんに手を挙げていただいたので一緒に行ってくる。審査というものも白山としては見越しており、現場で実際に同行者の方と管理者の方と来ていただいて、ものを見ながら結論を出すというよりディスカッションしながらどういうふうにそれぞれの立場で考えるのか、白山の協議会としては専門員らと次のを考えようとしている状況。
委員長：むしろアドバイザーとして現地に対して大いにコメントしてもらうといい機会になる。
委員：今の砂防の問題を含め、砂防というだけで、全体の河川管理という全体像というのを是非見てということになっているのか。ダムもありどんな形で利用しているかを含めてジオパークとの係わり、整理された話を聞いてもらいたい。
委員長：災害の観点だけにこだわらないということが大事。非常に大きな水の利用がなされている場所。
委員：砂防と河川が別々に動いている。
委員：防災というところと保全をどう絡めてやっていくか、ひとつの大きなエリアとしてみるのか、個々のジオポイントとしてみているのか議論しなければいけないところなのではないか。そのところの確認を是非とも現地でやっていくべきだと。これは栗駒山麓にも係わる話であのような大災害地をどのようにジオパークとしてやっているか、当然対策があっていいし、保全活動とどう絡めていくかということもこれから考えなくてはいけないところ。白山ジオパークでは現地でそういうところを関係団体含めて議論してみていく必要があるのではないか。今日の短い時間ではとても議論できない。
委員：審査の過程でポイントを事前に把握することで今後地元でやりやすくする可能性もある。
委員長：防災の観点の砂防とか自然環境を守る保全というのは今大きな問題でもある。どう活用され住民の暮らしにどう使われているか。酒も大きなテーマだけれども 酒にたいしてどのような水が係わっているかというのは話題になる。
委員：気になるのはエコパークとの積み上げ。
委員長：どなたかエコパークの実態をご存知の方？
委員：エコパークそのものとしては白山がエコパークになった経緯は、強く手を挙げたわけでなく、お宅がいいからなりましょうと言われてなった地域。極端に言うと自分たちがエコパークであることを忘れていて、ジオパークになったことによってジオパークの申請の過程や関連情報を集める中で世界的に見たらきちんとやらなければならないという状況になったが、特に人員を割り当ててまわしていけるほどには急にはならなかったので、ジオパークを動かしながらジオパークの担当が兼任という形でエコパークをやっている。エコパークの計画を日本で中心になってされているのは横浜国大の松田先生のところ。白山の動きに関しては彼を非常に頼ってジオパークの人たちも協力しながらエコパークはエコパークで生物学者と協力しながらまわしている。ジオパークがやりましょうということで

エコパークも活性化されるというか動ける人ができて組織的には並列にして兼任しているが、ジオパークの強い動きでむこうも動きだしている状況。
委員長：いずれにしても現地審査に行った方がよいという方向でのご意見だと思うが、その結論はよろしいか。中味に関する議論は終わってからみっちりやるということになるので、引き続きどういう観点で現地に赴いていただければいいかということのアドバイスをメール等でやっていただければと思う。行っていただく方に関しては後ほどまとめて審議していただく。ではプレゼンの順番で、栗駒山麓をどうするか。時間の配分からいうと三箇所に関して現地審査をするかどうかという観点でどこからでもお気づきの点あれば議論していただく。三箇所一緒に。
委員：どこもそれなりに準備をしてきて三島村は一度失敗してきているところだから、前年の審査に比べれば充実した内容であった。特に美祢のもって行き方がよかった。栗駒がわりと淡々としていた。現地に行ったらたぶんもっと活動があると思う。
委員：美祢については審査の後、いろいろアドバイスしたのだが、体制ががらっと変わって本腰入れて博物館を中心にスタッフを充実させて活発に活動していたのと、山口大学が学術的にサポートした。二年間おいたのが良かったと思う。熟成期間があっていいものになってきて、まだ課題があると思いますけどこれは十分審査していい方向になるのでは。
顧問：栗駒の荒砥沢をきちんと見ていただきたい。たいへんなことが起きた。6500-700 万の大規模地すべりは日本では始めて。それで津波がきて、残っていると思うが、ダム湖に流れ込んでいる支流の谷があり、そこに架かっていた林道の橋がなくなっていた。その橋げたは探してみたら上流にあった。上流にあるということはダム湖に津波がおきて上に押し上げられたということ。そういうのをジオサイトとしてきちんと残っているかわからないが。ジオサイトとして是非みていただきたい。
委員長：めったに見られない現象を保存することも大事。
委員：あの地震の日の夜に、音の話で実は二次災害が防止されている。防災大臣が現地に入って、山の音を聞いたと。土木出身の方なので、山の音を知っていると。当時総理指示は行方不明者を全力で救出するという指示だったが、市の現対本部は会議の中で総理指示を出すときに二次災害に留意して救出に全力をあげると言った。大臣から聞いたのだが、音を聞いていたからレスキューに入っていたのを 夜 9 時にやめた。本当なら総理指示に従ってやっていたはずだが、これで二次災害が防げた。実際に音がしたという話と市長が少し語れば、 あまり一般的な表現なので、どう表現を組み立てるか、現地に行った方は是非検討していただけたら。
委員長：災害の面でとりあげると非常にインパクトあるキーワードだが、全体にかぶせてしまったためわけわからなくなったと。
委員：あの説明のとおり。非常に情緒的なのですが、絶対みておいたほうがいいと雑談レベルなのにそれでもあげてきたので・・。
委員長：これをどういうストーリーに組み込むかご指導いただかないといけない。三島村

はどうか。人口増加に貢献しようという先生方。
委員：過剰な期待 がありすぎるのも怖い。現場で見てきて感じていただければなと。5 年後に 200 人というが、実現可能性がどれくらいあるのか。
委員：三島村はジオパークを定住のきっかけにしようとしているが、別のおもしろい政策も有名。お金くれるか子牛一頭くれるとしていて応募が多すぎて停止している。手ごたえは村として感じている。前の村長さんがジオパークをはじめて選挙で負けていい感じでうごきそうなので。ブレーキはききやすい。押してあげたほうが村長は動く。
委員：島間格差というのはないのか。
委員長：だいぶあるかもしれない。硫黄島が先行して他がそれに続くという。隠岐の場合は典型的にそれがあった。どこでもあると思うが。それはこっちがどういうふうにリードしていくかということになる。屋久島等との関係っていうのはあるか？島はみんな本土のほうを向いていて島同士のつながりがない。
顧問：薩摩半島南部大隅半島とか。動植物の関係もある。だから連携するといい。ただこれはいかにも書き換えられる。
顧問：海底にカルデラ噴火をもっているのはここだけ。
委員長：海底の構造はここはずいぶん調査できている。それをどういうふうにもちこんでくるか期待する。
顧問：マニアックなひとにはおもしろいところ。
委員長：研究者を招いてそういう取り組みというのはありうる場所だと。
顧問：村のひとたちが全部迎えにくるのには感心した。
委員：観光で交流人口を増やしたいということだが、ジオパークを研究している者としてはどうしてもひとめ見てみたいところではある。一方で観光ということを強調したところで言うとアクセスの間の居心地のよさ、現地のワイルドな魅力とアメニティの部分と折り合いをつけられるか、その可能性の部分は見たい。素材としてはものすごくすばらしい。皆さん期待している。いらした方がそこに滞在して、やはりすばらしかったかが未知数。
委員長：一般的に観光としてきた人の受け入れ体制が今日はわからなかった。それは是非調査の対象にしてほしい。
委員：普通に観光に来る方は三島村に何を期待してこられるのか。
委員長：いまは温泉でしょう。それもかなりマニアックに好きな人。
委員：日本秘湯の旅に入ってる。
顧問：大噴火でそうとうやられたので動植物などが変わっている。 そのへんをとりあげた展示があるらしい。そういうのに興味ある人もいる。
委員長：鹿児島県との関係はあまりわからない。
委員：去年から確認している地域の要望とか事前に確認してもらったほうがいいことはその場で言うのではなくて、行ったときまでに答えられるようにしてほしいというのは言ってもいい。鹿児島にいる間に県の人と会い、審査の時に県の人をひっぱりだしてきてその

場で聞き、協力はしますと言うタイミングになる。地元として審査の場をチャンスとして使ってもらうといい。
委員長：そう簡単ではない。あらかじめ聞いておくのはいいかもしれない。
委員：県としての対応は、桜島錦江湾の前例があるから。同じ県内の三島村がエントリーしたときに県としてどうやるかこちらで打診するのは可能。県の窓口で顔が見えている人がいる。アポをとるなり、行く前はこちらの情報を持った上で審査にのぞむのが現実的。
委員：船乗り場のターミナルに県の人招いて事前にヒアリングしていけば。
委員：島の生態系の保全は今かなり注目されていて小笠原も特にそうですが、外来生物の進入で固有種がいなくなっていくとか、生物系の人はそのへんシビアに見ている。そういう視点で喜界カルデラ周辺の生物をしっかりおさえて。研究者の方はそれなりに配慮されているだろうが、観光客が入ってくると当然自動的に入ってきて、10 年 20 年後にそれが問題になってくるから今のうちにそういうことを考えておくべき。
委員長：火山活動はどうか？
委員：活発。硫黄岳はしょっちゅう噴火している。
委員：火山防災協議会との連携とか島はどう関わっているのかとか。そいうのも表と裏の話。特に今、御嶽山の話もあったところなのでジオパークを使って協議会とそういうコミュニケーションができていたらいいとか。 地元の気象台とか。山はどこが観ているのか。
委員： 鹿児島測候所。大学は京大。
委員長：あそこは火山の問題もあるし、地震もおこるし津波もあるし台風は来るし、船は止まるし、たいへん。そういうところの調査をしっかりしていただきたい。
委員：さきほどの話もそうだが、気象台とか防災の関係者にどういう状況か鹿児島の桟橋で事前に行く前にヒアリングしたい。
委員長：気象庁との関係だが、気象庁からは全面協力するという発言を得ている。地方気象台で全然動かないところがあったら是非言ってくださいという話をいただいている。 気象庁がどのように関わっているか火山地震津波台風の観測体制とどう結びついて、観光客とどう関わるか、問題になる場所だ。船は毎日増やしたいとのことだがすぐ止まる。
委員：行政の名前で三島村・（ポツ）というのがあるのはめずらしいが、これどうしても必要なのか聞いてもらいたい。
委員：三島村は人口を増やすのが最大の目的。
委員長：現地審査は行っていいということでよろしいか？世界と日本と行っていただく方の候補がありますが、皆さんそのつもりになっておられるのか。
事務局：あまり地域に近づきすぎていないというか、客観的判断をしていただきたいということでこれまでのいろいろな活動の中であまり関係のないという方を選んでいる。
委員長：前に行っていただいた方との関係というのもある。
事務局：テーマとして着目するところがどこなのか事前に判断しながらあわせて三枚目にその後に行われる再認定を割り振りさせていただいているが、こちらも同じような基準で

選んでいる。各地域の課題を事前にメーリングリスト等で意見交換し、審査の短時間の中で事前に絞っていただくという意味で再認定まで名簿に記載させていただいた。
委員長：例えば、世界の審査に行くならば再認定の審査も同じ時期になっているとかいう関係があるのか。
事務局：白山手取川ジオパークのほうで再認定審査があり、また同じような意味合いで資料 3 のほうになるが箱根ジオパークから来年エリア拡大で新規申請をしたい意見がでておりあわせて再認定もご案内いただきたい。
委員長：資料 2 と資料 3 をみていただき、3 の中味をご説明下さい。
事務局：箱根ジオパークは来年度南足柄市を含めて新規申請をしたいとのこと。エリアとして南足柄市の面積は全体の 30%になるので新規申請をするもしくは南足柄だけ申請しておいて後から合体するなどいろいろ方法が検討されているが、箱根ジオパークについては全体を含めた新規として申請したいと考えており、再認定審査も一緒にしてほしいという要望があった。
委員長：全体の審査のなかでやったということにしてほしい。別に一緒にやるわけではない。
事務局：1 つの審査をもって 2 つの視点で見てほしいということ。
委員長：箱根の再認定審査をとりこんで新しいジオパークの審査をしてほしいと解釈したほうがいい。それをふまえて、資料 2 をごらんいただくと、再認定審査に行っていただく候補もそれに載っていて、その関係でその 4 箇所現地審査に行く候補ということで一緒にみていただいて議論していただきたい。箱根についてはいまの趣旨を認めてよろしいか？それでは、それでやらせていただく。
委員：どっちかがイエローになるとややこしい。
委員：まるまる新規だから全部認めないこともある。
委員長：そういう時は箱根がなくなる。
委員：再認定でなく新しくしたいということか？
事務局：結果は現地審査をした上でご判断していただければいいと思う。新しいジオパークが新規で認められれば新しいジオパークがそこで誕生する。箱根が吸収されるということになる。
委員長：箱根という名前はなくなってしまう。
事務局：再認定の部分がイエローという場合があれば、 新箱根のところが認定されれば再認定自体がなくなる。新箱根が見送りだった場合は、箱根の再認定に切り替わる。天草は新規の地域として別にやった。
委員長：時期は重なっていなかったか？箱根の場合はちょっと複雑になるが、もし新しいのがだめということになるとちょっとだいぶ悩まなくてはならないかもしれない。
ジオパーク委員会というのは現地を盛り立てようという役目をもっているのでお気づきの点があれば。

委員：前々から箱根ジオパークを立ち上げる時から南足柄市を参加させてもらいたいという意思はあったがうまくいかなかった。これは現地審査のときにも質問がでてお答えいただいて。南足柄市としてはいまの箱根ジオパークと一緒にやりたいという意向がでてきたというふうに聞いている。
事務局：天草の場合は協議会が別にできて申請をしていた。今回は箱根の協議会としてもうひとつ申請するという形。すでに南足柄の自治体としても箱根の協議会の中に加盟している。
委員長：意見の内容をお伝えいただいてそのつもりで準備をしていただくということでさしつかえないと事務局から伝えていただければいい。
事務局：白山は。
委員長：白山は資料 3 の一番下にあるように再審査を兼ねて世界の審査に行くということになる。再審査がとおらないようであれば結論がでているようなものだが。そうでなくて世界に申請するようになれば、自動的に再審査も認められているという扱いになろう。現地に行っていただく方は 4 箇所についてはよろしいか？どうしても自分も参加したいという場合もあるか。
委員：秋吉台の柚洞さんですが、秋吉台の委員なので。
事務局：かっこの中についてはまだ本人に話はしていない。これまで再認定をうけた地域の方を中心にひろっている。
委員：同行はしていただけると思う。このかたがはやくきまらないと。
委員長：お二人はよろしいか。 そのかたとの日程の都合もあるのでかっこの中の方は事務局で調整していただいて。再認定地域でやることはきまっているわけだが、それぞれ行っていただく方の候補がでているが、よろしいか。
委員：確認ですが、新規地域については委員会の日は決まっているか？
事務局：8 月の下旬か 9 月の上旬が例年。
委員：新規地域と世界についてはそこで決めると。再認定は例年どおり秋からやって 12 月に決める。
委員：このあとの現地審査研究会の延長という格好での活性化部会のなかでの審査部門で再認定審査についての現地審査の心得があり、それを使ったが、再認定についての書類がなかったのでそれを作ろうと、現地審査研究会の延長の活性化部会がやるので再認定審査について早めに情報を交換しておくなどの話をうまく利用してもらえれば。
委員長：皆さん参加してくだるでしょうから。こういう予定があると認識した上で意見を言っていただけるとありがたい。この件、これでよろしいか。
それから今日の話題として認定審査に対する課題改善報告の取扱いというのがあり、これはどういう状況なのか事務局からご説明いただきたい。南紀熊野、天草、立山・黒部、霧島。
事務局：認定審査の折に審査結果報告書の中で各地域にアクションプランというのを求め

ており、それに対する回答が 3 月末までに提出された。年度末までということに対して答えてきたのは 4 地域だけで、まだでていない地域もある。こういうのがでてきた時の対応として委員会として決まっていないのでここで確認していただきたい。またその意見をもって、午後からの活性化部会のほうでご検討いただきたい。
委員：現地審査研究会のほうでアクションプラン、宿題ペーパーについてどうするかということを柴田主査がやっていて私としてはこの場の共通理解と思っていたが、事務局と確認しておこうという話になっている。アクションプランとして結果としてでてきたものが本当に提出されているか、指摘事項がちゃんと返ってきたのか確認したほうがいいのではないかという議論があったが、結果的にはそれは 4 年後の再認定審査の時にみればいいだろうという話になった。一応それでは柴田ペーパーではその方針でやるということにはなった。ただアクションプランは普段、地域ネットワーク等を普及させることに使う、さらに 4 年後に活かすということでよいのではないかということで一旦まとまってはいる。またその後いろいろ議論があってアクションプランをもうちょっと前向きに使うべきではないかという意見もある。実際に書いた側と受け止めた側で議論があるかもしれない。ただ今のところその議論で一旦整理された。
委員長：出てきた報告を委員は見ているか。
委員：見ている。
委員長：その委員のなかに認定審査に行かれた方がいる。そこでまずいという判断があったときにそこでアクションがあったほうがいいか。黙っとけということは言ってないと思う。
委員：例えば、今年再認定審査になりますけど秩父に関してジオ学習の聖地というキャッチコピーはおかしいということを確か指摘したところ、アクションプランで返ってきたものには、私たちは教育旅行やるのだから学習の聖地でいいのだと。それはそこでとまっている。ある意味、やればきりがない。では、どこまでやるかがなかなか実際にはたいへんだろうということも含めて柴田ペーパーになって去年了承した。
委員長：指摘したことに対してきちんと反論していただければそれもまたよしということになっているから。4 年後の審査でいいと思う。
委員：あまりにひどければ一旦メールででもやりとりをして相手に返す。
委員長：もうひとつ、まだでてこないというのが問題。まったく無視されているというのがあるかもしれない。遅れているところはある。
顧問：現地に行った方が、レスポンスをメールでやったほうがよい。
委員長：審査に行かれた方には何か返答していただくか？
顧問：そうしないと何も使われなくなってしまうのが心配。
文化庁：基本的に 4 年後にしたらいいというのは、丁寧にその地域を見続けるのは負担が厳しいだろうという理由。もしやるのだとしたら案としては、その宿題ペーパーは、近隣のジオパークではシェアされていて互いにチェックすればよいというアイディアがあり、

それもひとつのアイディアとしてでていただけなので、全体としてオーソライズされたのは 4 年ごとに再認定審査の時に確認するということか。
委員：再認定審査が増えていくときにもう一度全部考えなくてはならないことがたいへんでアクションプランをあらかじめみておいて何かコメントのやりとりをしておくとできるかなという気はする。
委員：まじめにやるところは相当丁寧に対応するので、相当の負荷だと。まじめにやろうとするほどできなくなる。4 年後に結果がでるのでいいのではないかという流れになっていたのでは。
事務局：JGC の委員の皆さんにはボランティアに近いかたちで参加していただいていて。現地審査のアフターフォローに近い部分も委員会の仕事としてやっていただいていいのか、JGN の中の意見を言う立場で参加するほうがいいのか。
委員長：ルールとして今から決めておかなくてはいけないのか。あまり決めてしまうとやらなくてはいけなくなるが、これは困るというのがでてきた時には議論がでてくると思う。まったく何もでてこないのは忘れ去られてもいいものか問題。出さなくてもよいと思われても困る。
委員：宿題を出した責任はこちらにあるわけで、問題がないかどうかだけワンスルーして問題ありの場合はまた考える。
委員長：とりあえず、委員会の中で事務局から言っていただいて、見ましたかくらいのやりとりをしてもらったらどうか。問題があれば必ず言ってくると思う。
事務局：過去のものも含めて、提出されているか確認したい。
委員長：表にして未提出というのがあるかわかればいい。また問題が生じたときはネットワークで報告していただいてどう処置するか。とりあえず今までどういう報告がいつでているという表だけは作ってほしい。
委員：新しくなられた方は昔のメールのログがないのでそういうものをもう一回共有したほうがいい。
顧問：産総研のメールシステムが変わったときに、メールを移行したのですが、ばらばらになってしまって。事務局に委員会のメールを引き継げていない。
委員長：メーリングリストがどうなっているか、これはまたネットワークのほうで議論していかなくてはならない。今日用意していただいているなかに委員会の規則資料 4 というのがあるが、これは事務局体制がかわったことに伴って天から降ってきたような改定が行われている感じだが。
事務局：資料 4 のところに日本ジオパーク委員会会則案とあるが、案ではない。4 月 1 日現在で、もうある委員会になっている。今までは事務局の産業技術総合研究所で委員会の規則があったが、これは皆様に報酬を支払ったり位置づけをするために作っていただいていたものだと認識している。あくまでも日本ジオパーク委員会は尾池委員長を先頭にして学識研究者によって組織されているものだというふうに日本ジオパークネットワークが認識

しており、そういう意味では事務局が変更になって部分的な修正の基に委員会が既に動いているというかたちになっている。変更になった点は 4 点。第 2 条のところに今までは設置という項目で産総研のなかにおくということだが、新しい会則では責務ということで 第 2 条に記しているとおりにしている。第 4 条では産総研理事長が委嘱することになっていたが、新しいものは委員長が委嘱することにしている。第 7 条のところで報告という項目があり、委員長は理事長のほうに委員会の結果を報告する義務があったが、ここを情報公開ということで委員会の会議結果を委員長は公開するということにしている。第 9 条は事務について謳っており今までは委員会の事務は地質調査情報センターが行うという項目があった。これを委員会の事務は委員長が委員会に諮って決定すると変えてある。

委員長：前の会則を踏襲しながら新しい体制に合うように書き直したものが突然湧いてきたような感じだが。どうしようもないという事情もあるので認めていただきたい。

委員：顧問の方の委嘱に関して、第 10 条の雑則の中で必要な事項ということで決めたという理解でよろしいか。

委員長：そういう議論で決めてきたと思うが。委員長の権限で委員を解任することができるが委員長の解任は皆さんのご意見でやるという関係だと思っていただいて。もちろん、できるとは書いてあるが、委員会にお諮りのうえでというふうにさせていただく。

事務局：1 点補足。委員会の会則等については今回応急的な対応ということで 4 月 1 日から先行しているがこの後ユネスコジオパークという話が進んでいくと、国内の位置づけ等も代理人の選任等についてもいろいろな条件がかかわってくるかと思う。それに伴って委員会の会則の改定等がある。中川さんからあった顧問のことについても明確な位置づけというのはその中でご検討いただければ。

委員長：第 10 条雑則はなんでも処理できるようにとお認めください。日程に関してですが、何か案はありますか？現地審査の日程を決めるためには、次の委員会の日程を決めておかないと。

事務局：8 月の下旬から 9 月の上旬と。アジアジオパークネットワークがあるので。今まで日程を世界大会とか国際会議に合わせてやってきたのは GGN の審査中のアポイ岳と伊豆半島が今回 APGN で決定になるのでその結果によって白山がどうなるか。

委員長：それと現地審査とは直接関係ない。15 日から APGN があるからそれ前になるということか。9 月 4 日午後に決定する。それに間に合うように現地審査をお願いしたい。

委員：現地審査の手順の確認をしたい。現地審査の心得というのを去年の 4 月にこの場で確認をしたと思うが、その前の現地審査研修会のほうで五箇条というのがあり、メールで流しておいたので確認してほしい。

委員長：今回の出張でご覧になっていない方もいらっしゃるかもしれませんが。

委員：美祢だけ、誰がやるか。過去の方が現地の調整をやるということになっていたので、野辺さんや坂之上さんと相談していただいて。

委員長：古い資料は新しく委員になられた方に渡しているか。今日話題になったものはも

う一度流してもらいたい。
委員：来ていないところは事務局から催促を。
委員長：表を作っていただくことと同時に、今まででている 4 箇所の報告書を新しい委員の方には送っていただくように。現地に行かれたかたはチェックしていただいて。
委員:改善報告の取扱について。認定審査でアクションプランを出されて JGC から出して、改善報告があがってきてコメントは返されるのか？とくにそういうことはしていないのか？課題があったら、ここは何とかしてくださいとか。委員会どまりになるのか？
委員：あまり問題がある場合は、話をしましょうということで、特になければ。
委員長：特になければおいておきましょうということ。ただ、でていないところには何かしら言わないと、出さなくてもいいと思われても困る。
委員：世界の審査の場合もレポートをあげる。行った人は実は見ていない。審査員は全然見てなくて、次の再審査に行く時にこういうのがありましたよというのを教えてあげる程度。こたえるというアクションが重要。
事務局 : 4 月に ユネスコジオパーク 、ユネスコの執行委員会のほうでユネスコジオパークが 11 月の総会のほうに諮られることになり、現実味がでてきたのだが、ユネスコ国内委員会のほうと新しい組織がどういうふうになればいいのかという意見交換が始まった。情報は随時流していく。
委員：誰がやっているのか？
事務局：うちの事務局とかジオパークの関係者ということで、まだ形になっているわけではない。今後すすめましょうという確認がとれたというところ。
顧問：必要があれば APGN 諮問委員として意見を申し上げたい。
事務局：中川さんからご提案あった学会での申請書の審査というところについてはいかがか。
委員: 一年前に JGC で議論になってそれぞれ学会から提出されていることがはっきりし、バックグラウンドがはっきりしたので審査書類を自分たちで見るだけでなくて、学会の組織のほうに返して、そこで見てもらってそれぞれ委員が知見をもって返すというのはしてもいいのではないか。それは状況をみて判断しましょうということになった。
委員：意見を聞いて、現地に行く人にこれを確認して下さいと。審査の時の視点ですね。科学的な視点でここがもれているのではないかとか、それぞれの知見をそれぞれの学会の委員会のほうからもらう。
委員長：代表している委員がわかってここで言うのでは。
委員：書類をそういうところに見せてもいいのかとか。
委員：例えば GGN の場合は地質的な背景のところだけ IUGS に審査を任せる。それに類した形をここでもとるかという話。
委員：申請の書類がいったいなぜかとか、ある程度そういうものがまわっているというのを知っている人が増えているっていうのがいいのかなと。そいうのはどこまで考えたらい

いか、去年問題提起があり、1 年間そのままの形でいった。
委員長：申請してきた書類をみせてよいかどうか。
事務局：具体的な方向としてはデータでもらってダウンロードしていただく形をとるという話だったかと。方法論としては。
委員長：プレゼンは公開でやっていたから。学会に対しては。だから見ているはず。その背景になる申請書類はどうか。
委員：やるとよりよいのかどうか。
委員長：今のところ、出身の委員の方が学会に関係のあるものを抜き出して持ち帰るのは良いと思っているが、当然その議論のためにうちに出てきている。自動的に全部ダウンロードできる形というのはやや問題が残りそう。
委員：GGN の場合はその章だけ審査し、GGN の担当する人が 5 人くらいのレビュアーに送る。
委員長：それが自分の出身母体の学会に関係があるなら意見を求めるためなげてもらってもいい。
委員：より専門性のあるところ、例えば地質学会、ローカルジオロジーというところ。割り振ったあとで見せるか？
委員：書類のなかに関係の深いところがあれば、これでいいのか、受け止め方が。
委員：私の認識はそういう人がここに集まっているということ。
委員長：ここで議論を持ち出していただいてやはり地震学会に返して下さいとみなが決めればそういう役目ができる感じでいい。でも委員として自分の意見をまとめるために誰かに見せて聞いておきたいというのはご自由な判断でいい。禁止してはいないと思う。手にした資料は非公開ですとは言っていないので。一応申請してきたところも書類はオープンになってもいいような形できていると思うが自動的にダウンロードはやりすぎ。
委員：メーリングリストに自分で文章書き直して載せることはある。スキャンして送るということもできるが、取扱注意にしている。
委員長：委員の責任で判断していただいていい。

13：00
（了）